

一五 對馬及び朝鮮に於ける甘藷の傳來と其の名稱

甘藷は初め支那から琉球に、琉球から薩摩に、薩摩から内地各地方に傳はつた。甘藷に唐藷、琉球藷、薩摩藷等の別名あるは之が爲である。此の藷の琉球に傳來した年代に就いては種々の異説があるが、薩摩に傳はつたのは凡そ元祿十一年(四

内地に於ける甘藷の異名
薩摩への傳

内地への傳
來

對馬への傳
來

對馬へ傳來
の由來

九一八頃を見る事が出来る。而して此の諸の内地に廣まるやうになつたのは、主として井戸平左衛門と青木昆陽との力によるものなることは、誰しも周知の事である。平左衛門が之を内地に廣めたのは享保十七年(四紀二 七三二)で、元祿十一年よりも三十五年後、又青木昆陽が江戸に移植したのは享保二十年(四紀一 七三五)で、元祿十一年を去る三十八年後の事であるが、これが對馬に傳來したのは正徳五年(七紀一 七一五)であつて、元祿十一年を去る僅か十八年後の事と傳へられて居る。對馬に於ける甘諸傳來の如何に早かつたかは此の一事を以ても知ることが出来る。

扱て對馬には甘諸が如何なる順序を以て移入せられたかを研究するのも面白い事柄である。元來對馬は平地少なく土地瘠せ、水田にも乏しいから、一度飢饉の威を逞しうする事あらば、庶民皆手を束ねて死を俟つより外無いといふ悲惨な境遇に陥るのである。此の民の困苦を救ふべき大使命を帶んで世に現はれたのは實に陶山すやま訥庵先生其人であつた。訥庵は雨森芳洲、松浦霞沼と共に對馬の三大學者として世人から尊敬せられたのみならず、偉大なる經世家として記念すべき事業を造して居る。先生嘗て宮崎安貞の「農業全書」を繙き、安貞の甘諸に關

原田三郎右衛門

する記事を見、對州に於ける饑饉を防ぐには此の藷の效の著しかるべきを覺り直に之を薩摩に求めしめた。然るに當時薩摩では之を他藩に傳へることを禁じて居たため、之を得んとする訥庵の苦心は並大抵ではなかつた。其の最後の手段として先生は上縣郡久原村かみあがたぐはらの農民原田三郎右衛門といふ者を薩摩に遣し、辛うじて之を求め得たといふ話である。或説には三郎右衛門が夜陰に乘じ、番人の目を掠めて之を盗み來つたとも傳へられて居る。兎に角對馬に甘藷の移入せられたのは全く訥庵先生と三郎右衛門との力によるものといふ事が出來よう。今日も久原村の入口に「甘藷翁原田君之碑」とて一基の石碑が建てられてある。（明治三十八年五月建井上義臣撰書）其の文意をかいつまんでいふと、本島は土地瘠せ農産物に乏しく、不幸にして飢饉の見舞ふことあらばみすく日もあてられぬ慘狀を呈するのみである。翁は何とかして之を救はんとし、藩主に請うて遠く薩摩に渡り、始めて甘藷を將來し、之を久原の地に試植したが、培養時を失して好結果を收め得なかつた。不撓の翁は之に懲りず、再び薩摩に航して之を求め、再植よく其の志を達し、爾來本島の民は殆んど之を常食とするに至つた。とある。三郎右衛門が薩摩に赴き、

諸種を求めんとせし苦心は概ね斯くの如くであつたのである。

然るに當時の模様に就いて少しの異説がある。即ち元祿の末に琉球薩摩に甘諸傳來し、長崎が始めて種子を薩摩に求めた。然るに當時對馬には此の諸が無かつたので、平山左吉、内野市郎左衛門が郡奉行たりし時、互に相議し、正徳四年の冬種子を長崎に求め、留守居平田三左衛門が種諸三百を送り越したによつて、末年始めて之を二郡に分與したが、終に失敗に終つた。然るに久原村に老農三郎右衛門といふものあり、甘諸に就いて非常な工夫を凝し、微妙を心得て居るので、役をして栽植法を村々に教へしめた。それから甘諸の栽培が盛んになつたといふのである。

甘諸傳來の經路に就いては以上の如く異説はあるが、其の傳來の年代及び原田三郎右衛門の功勞を認める點に於ては諸説悉く一致して居る。三郎右衛門は元々農夫であつて、姓が無かつたのであるが、功によつて以後原田の姓を名乗ることを許され、且つ士分に引き立てられて、子々孫々嚴原の城下に住家をさへ與へられて居た。約十年前までは島民各戸に若干づつの金錢を醸出し、孝行諸錢と

と稱して三郎右衛門の子孫を扶助して居たさうである。朝鮮の書「山林經濟」に、
「今信使之經對馬島佐須舖也、見青田彌望無際乃諸田也、倭之艦軍啖諸根以當朝
夕、倭亦新得此種、猶未遍一國、其最初得之人自島中每戶聚五文錢、歲給此人報其
功云。」

とあるのも、よく其の間の消息を語つて居る。唯其の金額は時代によつて多少づ
つの差があつたらしい。對馬の人が今に三郎右衛門の徳を慕ひ「甘藷先生」の名を
以て呼んで居るのも無理ならぬことと思はれる。

對馬方言では甘藷を一般に孝行藷かうかういもといひ、普通の談話に際しては「コウコイモ」
と響かせて居る。唯南端の豆つ般つ近傍で唐藷からいもといふのが異様の感かんじを起させる。扱
て此の孝行藷なる語の語源に關しては、訥庵の「甘藷説」に文那起源なりとて「昔貧
困なる一家あり、老父病に就ける時、ごうにかして甘藷を口にしたいといつた。そ
こで、其の子が山中に入り辛うじて之を求め出し、父に呈したので、父は大いに喜
んだ。これより此の藷のことを孝行藷といふ」と書いてあるさうである。

要するに對馬に於ける甘藷の價值は他の地方に於て見る事を得ぬ重要さを

朝鮮に於ける甘藷の異名「ユウ」は孝行諸の訛りなり

有し、冬期などには田舎では豫め之を貯藏して食ふのである。以前には飢饉などあつて、一家糊口を支へ兼ねるやうな場合には、已むを得ず幼児の生命を奪ひ、世間に對しては幼兒を「諸掘り」に遣つた」など互にいひ馴らして居たさうである。此の短い語句を味つて見たばかりでも、對馬に於ける甘藷の魔力を考へずには居られないのである。

話は變つて朝鮮に於ける甘藷傳來の由來を少しく述べて見たい。朝鮮では甘藷を甘子(甘丕)なる總稱を以ても呼び、又南甘子(甘丕)或はユウともいふ。此のユウといふ名稱は余も以前から純粹の朝鮮語ではあるまいと考へて居た。然るに對馬を旅行するに當り、計らずもそれは該島方言孝行諸の訛りであることを發見するに至つた。

徳川家治新に將軍となるや、朝鮮は乾隆二十八年(西紀一七六三)例によつて將軍家に向つて信使を送つた。其の時の正使は趙巖、副使は李仁培、從事官は金相翊であつた。其の使節一行中の一人が書いた「海槎日記」(乾隆二十八年八月三日より同二十九年七月八日まで)の中に次の記事が出て居る。

〔十八日（乾隆二十九年六月十八日で、江戸から歸途に就く時のことである）〕戊戌晴南風留西山寺○島中有草根可食者、名曰甘藷、或謂孝子麻、倭音古貴爲麻、其形或如山藥、或如菩根、如瓜如芋、不一其狀、其葉如山藥之葉、而稍大而厚、微有赤色、其蔓亦大於山藥之蔓、其味比山藥而稍堅、實有真氣、或以半煨之栗味、生可食也、炙可食也、烹亦可食也、和穀而作糜粥可也、拌清而爲正果可也、或作餅、或飯而無不可、可謂救荒之好材料也、此物聞自南京流入日本、日本陸地諸島間多有之、而馬島尤盛云、（中略）昨年（乾隆二十八年）初到、佐須奈浦、見甘藷求得數斗、出送釜山鎮、使之取種、今於回路、又此求得、將授於萊州校吏輩行中諸人、亦有得去者、此物果能皆生、廣布於我國、與文綿之爲、則豈不大助於東民耶、萊州所種、若能蔓延、移栽於濟州及他島、以爲宜矣、聞濟州土俗或似馬島者多、甘藷如果蔓盛、則濟民之逐歲仰哺、羅倉之泛舟運穀、庶可除矣、但地宜未詳、土產皆異、蕃殖之如意、亦何可必也。

以て甘藷が當時一行の人々に如何に珍らしく感ぜられたかの一斑を窺ひ知ることが出來よう。又徐有渠の書いた種藷譜（道光十四年、西紀一八三四）といふ書に、姜氏甘藷譜の說を次の如く引用し、

〔姜氏甘諸譜〕嘗諸倭人呼爲古古伊文瓜琉球國呼爲蕃茄聞之對馬島人初產周厓國其俗以諸代穀禁不得出境有呂私國人之業商至彼者潛竊一莖以歸遂遍南國呂私卽日本屬國云按周厓疑朱厓之訛（叙源の部）

尙は徐自身は次の如く述べて居る。

〔我東傳種始于英宗乙酉（乾隆三十四年西曆一七六九年）來自日本蓋香諸也若山諸則未之見焉〕

（叙源の部）

嘗聞甘諸自閩浙漸及內地將不復以水旱爲憂念得此物傳種東國其利益有不可勝言願恨無由致之適有故人子隨信使往日本余以是勤托之明年春余夜坐姜生啓賢在側余言信使之歸其得諸種以來未可必吾意萊釜間必有傳種者往彼窮搜或可得恨無人能往耳姜生慨然請往四月辭去七月晦用木櫃貯諸種以來云是信使行所購求也余治庭前地種之至八九月蔓葉甚盛幾遍數步旣而隣人有與萊伯親熟者使作書盛言諸事萊伯果力圖之明年諸種多至京又多留植其地而吾庭中所植不善收藏皆不可作種求得數本於萊伯家分種之諸種之傳於國中始此卽乙酉歲（英祖乙酉乾隆三十一年西曆一七六五年）（源藻の部）

以上の如く海槎日記中に現はれた孝子といふは語意孝行に同じく、孝子麻又は古貴爲麻の麻は朝鮮語いも類の總稱たる叶といふ語である。元來國語の「イモ」といふ語は朝鮮語叶と語源を同じうするもので、對州人が「コウコイモ」といつた場合に、朝鮮人は直ちに朝鮮語の叶を聯想し孝行藷なる語を古貴爲麻（發音コギイマ又はコギマ）といひ、又今日の如くコユ叶といふやうになつたものと倒する。「種藷譜」にある「古古伊文（發音コゴイム）の如きは一層原語に近き形を示して居るものである。

又之を年代の上から考へて見ても、甘藷の對州から傳來したことは明かである。即ち海槎日記に之を乾隆二十八年（我が寶曆十三年西紀一七六三年）としてあるのは間違の無い事と信ずる。唯種藷譜に「始于英宗乙酉來自日本」としてあつて、前者よりも二年後れて居るやうに書いてあるのは一寸おかしいが、同書中「萊釜間必有傳種者」などあつて、乙酉以前にも南鮮には此の藷のあつたことをほのめかして居るし、又一方には藷種之傳於國中始此、即乙酉歲也」など、京城地方に藷の傳はつたのが乙酉歳といふ風に明記してあるから、此の甘藷の朝鮮傳來は、まづ乾隆二十八年と見る

のが穩當と思ふ。對馬で始めて之を栽植したのは我が正徳五年であるから、廿諸の朝鮮傳來は對馬に後るゝこと約四十八年である。當時日本内地では之が傳播後五六十年も經過して居るから、各地に大分擴がつて居るに相違ない。海槎日記中に「日本陸地諸島間多有之」などいつて居るのも、當に然るべき譯である。併し正徳以來彼我使節の往來も中々頻繁であつたのであるから、寶曆年間まで約五十年間、朝鮮使節が此の諸に氣が附かなかつたといふ事も有り得べからざる事である。公々然の輸入は無かつたにしても、寶曆以前にも多少之が朝鮮に傳來したらうと思はれるのである。